

私の中の三つの絵

—— 小山政憲先生を偲んで ——

工 藤 茂

小山政憲先生の亡くなられたことを知ったのは、昭和60年10月15日発行の「別府大学通信」紙上においてであった。

残念ながらそれまで先生の御逝去を知らなかった。というのも先生の亡くなられた6月24日には、まだ北京で仕事をしていたからである。その日私は北京で何をしていたのだろうか、日記を繰ってみた。

その日北京は晴れであった。私は早朝起床して二つの原稿を推敲し投函している。それから語言学院に出て午前中は文学汎読の試験、午後は日語教師培訓班の研修生のレポートの指導をしている。夜は宿舎に帰って応用問題の作成。朝6時から夜中の12時まで、仕事に追われた一日であった。

その日別府では小山先生がひとりあの世へと旅立たれていたのである。残念でしかたがない。今となっては遅いのだが、ここに謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げたい。

小山先生の思い出は尽きないほどある。その中から三つほど印象に残っている絵をここに紹介して、先生追悼の意に代えたい。

私が別府大学に着任したのは、昭和51年4月のことである。当時小山先生は文学部長をしておられた。その先生が学生食堂で昼食をおとりになっているお姿を、よくお見かけした。学生たちの話し声を耳にしなが、お食事しておられたのに違いない。そのお姿が印象的であった。人々の声は天の声だという。学生たちの声を天の声として聞き、その声を生かして教育をなさっておられたのだろう。先生の語学の授業にそれが反映していることを、卒業判定教授会の御発言などに伺うことができた。

次の絵は、別府大学国語国文学会で中島敦について講演していただいた時のお姿である。

先生は京城府立京城中学校で、中島敦と同級生であった。後に文治堂書店発行の『中島敦全集』の月報「ツシクラ」第四輯に、「中島敦の思い出」という一文

を寄せておられる。そのようなことから、講演をお願いしたのであった。先生は中島のことを同級生仲間では「トン」と呼んでいたこと、中島が父に反抗し対立していたこと、その悩みを先生に語っていたことなどを、中島の習作「プールの傍で」を実証するように話された。

中島敦の小説「山月記」に言及されて、「彼の『山月記』を読みかえすと、今でも涙が溢れそうになります。」と言われた時には、先生の大きな両眼が潤み、今にも涙が流れるのではないかと、私のほうが心配するような表情をなさっておられた。

「山月記」は中国の「人虎伝」に材を得た小説であるが、虎に化した主人公李徴の苦悩が、そのまま中島の苦悩であったことを、中島の友人であった先生の口から直接聞く時、それは重い実感となって心に浸み込んだ。

先生はまた『宝島』の作家R. L. Stevensonが世紀末の作家であり、そのR. L. Stevensonを描いた「ツシタラの死」が、「光と風と夢」と改題されて現在に残る小説であることを話された。

それが何年前のことであったか忘れてしまったけれど、講演の内容と先生のお姿は今も鮮やかな絵となって、私の中に残っている。

濱川勝彦氏の「中島敦の人と作品」に、京城中学時代、小山政憲氏、湯浅克衛氏等が同人雑誌を出していたことが書かれている。先生は英文学の研究者であると同時に、文学者でもあったのだ。しかも近代俳句についても造詣が深く、日本の近代文学にも通じておられた。広く深く文学を研究されたお方であった。

最後の絵は、夜汽車の中でのひとこまである。私は先生と向かい合って座席に腰を降ろしている。記憶の中では、ぼんやりとほの暗い夜汽車の情景となっているが、実際には明かるかったのだと思う。翌日熊本で入試説明会があり、4限目の講義を終えた後、私たちは車中の人となっていたのである。夕食どきになって、私は弁当にビール、それに酒を買った。先生は小さい缶ビールひと缶と弁当を買われた。私が酒を進めると、先生は、「若い時はいいねえ、酒が飲めて。僕も若い時はずいぶん酒を飲んだが、今は体が悪くて飲めないのだよ」と断われた。そして缶ビール1本で弁当を召し上がっておられた。思えばその時の病気がやがて先生の命を奪うことになったのだが、その時は気づかずに私一人が酒を飲み、勝手なことを言っていたのである。

夜汽車での先生の笑顔は寂しかった。弁当を召し上がる姿が侘しかった。それが私の記憶の絵を、ほの暗く染めているのだろう。先生は文学と酒をこよなく愛された方だった。